Ha-Joon Chang,

Bad Samaritans: The Guilty Secrets of Rich Nations and the Threat to Global Prosperity.

London: Random House, 2007, xi+276pp.

佐藤　創（さとう　はじめ）

8年前に本誌にて評者が紹介した，本書著者の当時の新作 *Kicking Away the Ladder*（London: Anthem Press, 2002）(注1) はミュルダール賞（2003年）を授与された。さらに著者は経済発展における政府の役割について優れた研究業績をあげたとの評価により2005年にレオンティエフ賞も受賞し，その知名度は8年前に比べると格段に高まっている。今回紹介する本書は，ケンブリッジ大学で教鞭をとり続けている著者が，さらに広い読者層向けにグローバリゼーションと開発について書き下ろしたものである。実際，本書のカバーにみえる推薦者の顔ぶれには少々驚かされる。スティグリッツ（2001年ノーベル経済学賞）やラリー・エリオット（英ガーディアン紙経済編集主幹）らの経済学者のみならず，高名な言語学者チョムスキー，さらにはバンド・エイド（1984年のエチオピア飢饉に端を発するロック・ポップス界によるチャリティ活動）を主導したことで名高いミュージシャン，ボブ・ゲルドフの推薦文まで記されている。

一般向けだからといって，内容の薄いものであるかというとそのようなことはまったくない。学問的な質の高さを保ちつつ，幅広い読者層を意識して工夫を凝らし，絶妙なバランスを持つ作品になっている。同じくレオンティエフ賞を先に受賞しているガルブレイスやアマルティア・センのような，象牙の塔を出て文筆活動を展開しうる論客であるとの評価を著者は確立しつつある。

本書のタイトルは「悪しきサマリア人たち」である。「善きサマリア人」は，キリスト教が浸透している社会では誰もが知っている言葉であるらしい。もともとは，世情では評判の悪いサマリア人のみが窮地にあった人を救う努力をしたならばどう考えるべきかという寓話であり，転じて，一般に，不利益を被る危険を顧みず他人を助けることをいう。さらに，窮地の人を救うべく善意の行動をとった場合，その結果については原則として責任を問われないという「善きサマリア人の法」と呼ばれる判例法・議会制定法が英米法世界では広くみられる。本書のタイトル「悪しきサマリア人」はこうした「善きサマリア人」概念のパロディである。

それでは本書のいう「悪しきサマリア人」とは何をなす人々か。過去数百年の歴史を顧みれば自らは保護主義的な貿易政策や介入的な産業政策を用いて経済発展してきたことが明らかであるにもかかわらず，「わたしがしてきたようにではなく，わたしが言うようにやれ」と，「貧しい国々に自由市場と自由貿易を伝道する豊かな国々の人々」を指す（p.16）。その結果，善意であれ悪意であれ，貧しい国々の市場で「大きなシェアを獲得し」，あるいは貧しい国々の困難に「乗じている」人々である（p.16）。

各章のはじめに示される挿話の面白さと，そこから議論を展開するその語り口の軽妙さは圧巻である。挿話は，朴軍政下の韓国で育った著者自身の少年時代の話であったり，車の製造をはじめた頃のトヨタの話であったり，正式な発売日前に香港にて販売されていた海賊版Windows 98の話であったり，『ロビンソン・クルーソー』の著者ダニデル・デフォーの知られざる顔の話であったりする。そのうえで，自由市場や自由貿易が経済発展に貢献するという考えや，文化や政治腐敗が経済停滞の原因であるとする考えが，歴史に照らしていかに誤りに満ちているかということを示しつつ，安易な民営化や市場経済化に警鐘を鳴らし，幼稚産業の保護や資本移動の規制，産業政策の重要性を強調する。

著者の主張への賛否はともかく，本書は英文も平易でありつつユーモアに富んでおり，開発途上国の経済発展問題について関心を持つ読者はもちろん，日本における貿易自由化，民営化，規制緩和などの問題に関心を持つ読者にも，ぜひ一読をすすめたい。

（注1）『アジア経済』第44巻第3号（2003年3月107ページ）。なお，邦訳も2009年に出版された（横川信治監訳『はしごを外せ――蹴落とされる発展途上国――』日本評論社）。

（アジア経済研究所在ロンドン海外調査員）